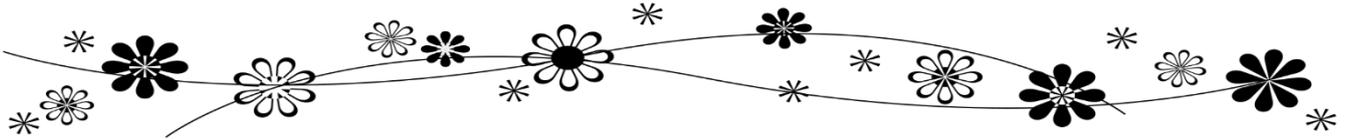


ボランティアグループがつくる和歌山県ジェンダー平等推進センターの書評誌

この本よんだ？

～りいぶる BOOK プラス～



ババヤガの夜

王谷晶 著 河出書房新社 2020年 (K:エッセイ・文学)

暴力が唯一の趣味になっていた新道依子は、ある日、暴力団の屋敷に連れてこられ、会長の一人娘である尚子お嬢さんの運転手兼ボディガードを命じられる…。映画のようなリアルなアクションが頭に浮かび血の匂いがして来そう。だけど暴力描写は登場人物たちを浮き彫りにするための手段であり、もちろん暴力だけの物語ではない。一気に読む。読まされてしまう。作者の罠にまんまとハマる。もう一度読み直す。



「愛ではない。愛していないから憎みもしない。憎んでいないから、一緒にいられる。」「血縁でももちろんない。家族も違う。恋人ではない。友達というのもしっくり来ない。〈中略〉これに名前は付けられない。」主人公たちの、はっきりとラベリングできない関係と人生。それこそがこの物語。

イギリス推理作家協会の翻訳部門に日本人として初受賞。アメリカのラムダ文学賞の〈LGBTQ+ミステリー部門〉最終候補作にもなっている傑作。とにかく読んでみて！ (み)

ひとりでも安心して暮らす方法

松原惇子 著 大和書房 2011年 (L:高齢社会・福祉)

著者は女性に元気を与える本を多数出版。本音の語り口が特徴。ひとりの老後を応援するNPO法人SSS(スリーエス)ネットワークを立ち上げ活動に力を注いでいる。

誰もがひとりになる時代。ひとりを前向きにとらえ、イキイキ暮らすことはできると言う。本書は5章で構成され、1章に「世の中にはひとりになりたくてもなれない人もいる。家族や親戚の中で、自分を殺して生きざるをえない人が、どれだけひとりになることを切望しているかしのれない。あなたはひとりだ。ひとは悪くない。いえ、素晴らしい。」とある。これを読んでハッとした。そうか、こういうこともあるんだなあ。他にも参考になる言葉が満載だ。何年か後にもう一度読みたいと思っている。力が湧いてくる本です。



(はんちゃん)

まいまいつぶろ

村木嵐 著 幻冬舎 2025年 (K:エッセイ・文学)

題名の「まいまいつぶろ」(カタツムリ)とは、歩いた後には尿を引きずった痕跡が残るため、そう呼ばれ蔑まれていた九代将軍徳川家重のことである。

八代将軍吉宗の長男でありながら脳性麻痺のため言語や排尿、四肢の障害があり、誰も彼の言葉を理解する者がいない。そんな長福丸(後の家重)の言葉を真に理解する者が現れた。それが彼の小姓となった兵庫(後の大岡忠光)だ。

後に「まいまいつぶろじゃと指をさされ、口がきけずに幸いであった。そのおかげで私はそなたに会うことができた」と家重に言わしめた忠光。この二人が魂で結ばれていく小説で涙なしには読めない。

文芸評論家の縄田一男氏が巻末の解説で、さすがは村木嵐だと絶賛しているのも頷ける。

(花賀)



なおくんと和歌山おやつ。

monaca 著 株式会社メディアソフト 2022年 (Q:コミック)

りいぶるのあるビッグ愛まで、自宅から歩いて30分ほど、師走の街で、元気にお菓子を売っているお兄さんとお話をした。お兄さんから、フランス語で幸せは「ボヌール」というと教わった。おやつを食べると、だれでも幸せを感じる。おやつを食べることさえできない状況下の方もおられることを思うと、もっともっと世界が平和になればと祈らずにはいられない。

この本では、和歌山県田辺に滞在した時に食べたおやつのエピソードが書かれていて、あるお菓子の「我が家のルール」が紹介されている。そんなルールが作れるのも、平和であればこそである。

書評を校正するためりいぶるに行くと、本が人気で貸し出されていて、内容がわからなくて、困っている。そんな人気の本。ぜひ読んでみてください。

(きよてる)



女と男、このしんどさは誰のせい？

描き子 著 永岡書店 2021年 (Q: コミック)

著者は30代既婚、夫と子ども3人暮らしのグラフィックデザイナーやイラストレーターとして仕事をする女性である。自分は「女のくせに」とか「女だから」といわれ苦しんでいると思っていたが、男性に訴えると、「男性だって大変だ、女性は得をしている」という。

本書では、社会生活、結婚、育児などで起こる、女性が苦しんでいると思う場面を漫画で具体的に描き、最後に、男性と意見をすりあわせする。男と女の立場を具体的に想像することでお互いを理解しようとするものである。見方を変えて、考えることも必要だなと感じた。(か)



ののほな通信

三浦しをん 著 KADOKAWA 2018年 (K: エッセイ・文学)

恋愛、友情、性別という枠組みを超え、「のの」と「はな」は惑星のように離れたり近づいたりを繰り返す。二人を結ぶ糸は、ことばによって時に太く、時に細く、しかし千切れることなく紡がれ、二人の往復書簡のみで構成される本小説は400ページに渡る。

ことばは時に人を分断する。しかし二人の間でだけ通じる、心を通わせあうための道具でもあったのだ。

あなたも大切な人に手紙をしたためたくなくなるはずです。(桃文庫)



ミュタント・メッセージ

マルロ・モーガン 著 小沢瑞穂 訳 KADOKAWA 1999年 (K: エッセイ・文学)

本書は、著者のマルロ・モーガンさんがオーストラリアのアボリジニと共に砂漠を旅した体験を描いた物語です。旅を通して、アボリジニが物質文明や言葉への依存から離れ、直感・自然・共同体と調和して生きる姿が描かれています。自然や他者と深くつながり、直感を信じて生きる姿は、「本来の生き方」を見つめ直すきっかけになります。

読むほどに価値観が揺さぶられ、「本当に豊かな生」とは何かを考えさせられる一冊です。(めい)



ジェンダー目線の広告観察

小林美香 著 現代書館 2023年 (A: フェミニズム)

駅構内や電車の中など、都市空間は広告で溢れている。「広告の中での女性像の扱い方は、社会の中での女性の地位を如実に反映する」という視点から著者は「脱毛広告」等に注目し広告を観察、分析する。また本書は、男性脱毛と『「デキる男」像』との関係にも言及する。

メディアリテラシー(情報を見抜く力)に関心のある人にもお勧めです。(O.S)



眠れない夜に思う、憧れの女たち

ミア・カンキマキ 著 末延弘子 訳 草思社 2024年 (K:エッセイ・文学)

著者は四十代、独身、子なしのフィンランド出身の女性作家である。ジェンダーギャップのほぼない国に生まれ、学歴もあり、出版社を勤めあげ、作家となった彼女がいわゆる「女の幸せ」を持っていないことにがんじがらめになる。よるべない夜に眠れず歴史上の理想の女たちを思う。女たちに守護聖人となり前に引っぱってもらい、参考にし、アフリカ、イタリア、日本を旅する。デビュー作「清少納言を求めてフィンランドから京都へ」に続く紀行エッセイである。同じ場所におり立ち女たちに思いを馳せる。しかしながら女たちは完璧な強い女でも新しい女でもなかった。家族への手紙等調べるうちに女たちの苦悩や弱さをみつけ愕然とする。時空を超え女たちから前を向くための言葉を受け取りながら旅を続ける。旅の終わりにトーマス・マン「魔の山」のサナトリウムに見立てた芸術村のような所に滞在する。そこで彼女はよるべなさを少し昇華できたようだ。

(せいこ)

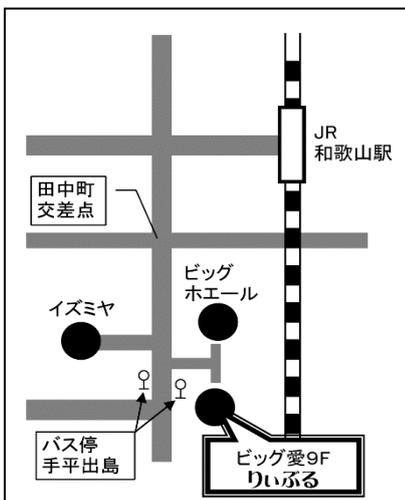


「バイアス社会」を生き延びる

中野信子 著 小学館 2023年 (K:エッセイ・文学)

本書の興味深い点は、「バイアス社会」と戦う方法ではなく、生き延びる方法が書かれていることです。そもそもバイアスとは、一般的に、偏りや思い込みなど、人間の認知の歪みを幅広く指す言葉です。そして、著者は脳科学の観点から、バイアスの存在理由を人間の脳の限界と説明しています。バイアスは、人間が短時間で大まかな正しさを判断する助けとなっていると考えられます。自分の思う正しさが、集団の中での普通と異なる場合、自分以外の方がバイアスを持っていると考えがちですが、自分にもバイアスはあるのです。何が正しくて、自分はどうするべきなのか、状況をよく観察した上で判断した方がいいと思えるでしょう。社会での振る舞い方について柔軟に考えられるような本です。若い読者向けの本ですが、大人が読んででも参考になる点が多くあります。ぜひ読んでみて下さい。

(A.T.)



この本 よんだ? 第32号 (2026年3月発行)

◇企画・発行 りいぶるぶらす

◇協力 和歌山県ジェンダー平等推進センター「りいぶる」

【編集後記】

今回新しく2人の方が参加されました。せいこさんはりいぶる主催で書評誌が発行されていたときに執筆されたことのある方で再び参加してくれることになりました。きよてるさんは、高野町の「やきもち」が有名なあたりの出身の方です。よろしくです。

★書評誌のご感想などはこちらのメールアドレスまで。

E-mail libreplus@yahoo.co.jp